



TITLE:

[書評]ガリマール版『注意についての論文』
校訂上の諸問題Paul Valéry, Mémoire sur
l'attention, in Cahiers 1894-1914, tome VI,
éd. Nicole Celeyrette-Pietri, Gallimard, 1997

AUTHOR(S):

森本, 淳生

CITATION:

森本, 淳生. [書評]ガリマール版『注意についての論文』校訂上の諸問題Paul Valéry, Mémoire sur l'attention, in Cahiers 1894-1914, tome VI, éd. Nicole Celeyrette-Pietri, Gallimard, 1997. 仏文研究 1998, 29: 177-182

ISSUE DATE:

1998-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/137868>

RIGHT:

《書評》 ガリマール版『注意についての論文』校訂上の諸問題
Paul Valéry, *Mémoire sur l'attention*, in *Cahiers 1894-1914*,
tome VI, éd. Nicole Celeyrette-Pietri, Gallimard, 1997.

森 本 淳 生

ポール・ヴァレリーをめぐる「神話」のひとつに「20年間の沈黙生活」というものがある。1895年に『レオナルド・ダ・ヴィンチの方法序説』、1896年に『テスト氏との一夜』を書いたのち1917年の『若きパルク』にいたるまで、いくつかの小さな評論や詩篇をのぞいてほとんど発表されたものがないのだから、たしかにヴァレリーは約20年間にわたって「沈黙」していたと言えるかもしれない。しかし、1894年以来早朝に書きつがれてきた『カイエ』はこの期間もたえることがなかったし、1898年頃からは散文詩『アガート』において眠る人の内面を記述するという困難な試みにとりくんできた。「沈黙」は「停止」を意味しない。1900年代をつうじて『カイエ』における思索はつねに活発であり、やがて1910年頃にはそれまでの思索の整理分類を思い立つにまでいたる。『若きパルク』の製作へといたる『旧詩帖』の整理の始まるのが1912年であることを考えれば、「沈黙期」におけるヴァレリーの活動はほぼ連続的に行われており、けっして衰えたことがなかったといっても過言ではない。

『注意についての論文』はそのような活発な「沈黙期」に書かれたきわめて重要なテキストである。これは人文社会科学アカデミーによって主催された「注意」をテーマとする「サントゥール賞」哲学部門に応募された論文で、1904年に書かれたものと考えられる。この論文でヴァレリーは『カイエ』における心理学的、哲学的省察をまとめあげ、それまでの思索の検討を行っており、また一方で、当時ひろく読まれていたリボーの『注意の心理学』を暗に批判しながら、1900年前後から読みはじめていた『純粹理性批判』をふまえつつ、きわめてカント的な認識理論を展開している。したがって、このテキストは同時代の心理学やカントなどとのヴァレリーの関係を考えるさいにきわめて重要なものであるが、さらに「沈黙期」におけるヴァレリーの思索の展開を考えるさいにも欠くことのできない資料になると思われる。『アガート』から『若きパルク』へといたる彼の思索の推移は、『注意についての論文』をひとつの里程碑にすえることでより鮮明に跡づけることができるのではないかと考えられるからである。

しかし、その重要性にも関わらず『注意についての論文』は従来ほとんど無視されてきた。ヴァレリー自身が公刊しなかったという事情もあるが、フランスにおいてすら活字版は存在せず、一般に読むことは不可能であった。これはたとえば、ヴァレリー自身が公刊しなかった『アガート』が1956年の段階ですでに公にされていることを考えれば、著しい対照をなしている。当然、現行

の筑摩書房版の『ヴァレリー全集』にも翻訳は収められていない。したがって昨年、ニコル・セレット=ピエトリ教授が活字版『カイエ』第6巻の付録としてこの『注意についての論文』を公刊したことは、大きな意味をもつてきごとだったのである。

私自身は自分の研究テーマとの関連からこのテキストに大きな関心を寄せており、論文執筆のためにかなり細かくこのテキストを読む必要もあったので、公刊後セレット=ピエトリ教授のエディションを検討することにした。『注意についての論文』の草稿類は現在パリの国立図書館に保存されているが、セレット=ピエトリ教授はアカデミーに提出されたテキストの直前の段階である第5段階の草稿とのヴァリエーションをいくつか挙げているので、それも合わせて確認することにした。幸い国立図書館の草稿については手許に写しがあるので比較するのは容易だったからである。ところが調べていくと、このエディションにはいくつかの問題点があることがわかった。まずすぐ目につくのはヴァリエーションの箇所がまちがって指摘されていることである。さらに国立図書館の草稿とちがって動詞がないために文法上読解不能な箇所も存在した。

公刊されたテキストに疑問点がある場合は結局草稿を見ることが解決の早道なので、今年の4月から5月にかけてパリに滞在し、フランス学士院の中にある人文社会科学アカデミーのアルシーヴに保存されているというこのテキストのオリジナルを調査することにした。あらかじめ電話をし、言われた日時におもむいてみると、意外なことに問題のオリジナルは現在行方不明であるという。1990年代にはいつかイタリア人の研究者が閲覧に来た時も行方不明で結局発見できなかったという話であった。そして司書の男性が言うところによると、1956年に国立図書館で行われたヴァレリーに関する展覧会に貸与したまま返却されていないということらしい。奇妙な話とは思ったが国立図書館で事実関係を確認するしかないなので、そちらに向かうことにした。

国立図書館でヴァレリー研究の大家でもあるフロランス・ド・リュシー氏と話す機会がえられたので、アカデミーで聞いた話をしてみるとそんなことは信じられないという。調べてみるというのでこの問題については時間をおくことにしたが、私にはもうひとつ別の重要な疑問が残っていた。それは紛失したオリジナルからどのようにしてエディションが作られたのか、という問題である。ド・リュシー氏は『注意についての論文』が収められている活字版『カイエ』の共同編集者でもあるので、この点を訊いてみたが、それはセレット=ピエトリ教授が作ったものなので自分は知らない、ニコルに電話をしてみろ、という返事だった。あなたでも知らないのですかと訊くと、私でもしらない、自分はオリジナルを今まで見に行こうとしたことはないが、どうも他の研究者もオリジナルにたどりつけた者はいないようだ、ということで、徹底的に調べようとしているお前は立派だというようにおだてられて私は帰路についたのであった。

校訂のような微妙な問題で直接校訂者に電話をするのは気がひけたが、フランスまでわざわざ来て問題を放って帰るわけにもいかないので、意を決してセレット=ピエトリ教授に電話をすることにした。はじめにかけた何回かは話し中だったのでかなり気をもんだが、やっと通じた電話でおそろおそろ訊いてみると答えはあきれるほど簡単だった。彼女が博士論文を準備していた1970年代にアカデミーでオリジナルのノートを取り、それをタイプ打ちしたものをもっていたので、今回はオリジナルが見つからないこともあり、自分の手持ちのノートをもとにしてエディショ

ンを作ったのだそうである。近年のテキスト生成論の隆盛もあって、学生の頃から草稿研究の重要性や厳密なテキスト校訂の必要性については暗に陽に教え込まれてきた私のような世代の研究者にとって、当のフランス人研究者がこのような態度で校訂を行っているということは驚きをこえてショックのようなものではあつた。私自身は生成論の立場をとるわけではないし、校訂を行うだけの実力があるとも思わないが、フランスの学者は立派にきちんと仕事をしているのだと思ひこんでいたからである。私は彼女が自分のノートを用いたことそれ自体を非難しているのではない。もし実際にアカデミーのオリジナルが紛失してしまっているのであれば、彼女のノートは貴重な写しとなり、ヴァレリー研究にとって大切なテキストとなるだろう。しかし注で何も断ることなく、自分のノートをあたかもオリジナルから起こしたものであるかのようにして公表することに問題がないかどうかはおのずと明らかである。

校訂の疑問が失望的なかたちで解決されるとともに、アカデミーの司書の男性が言っていたことが間違いであることも明らかになった。実際1970年代にセレレット=ピエトリ教授がアカデミーで筆写しているのであれば、当時『注意についての論文』は国立図書館からアカデミーの方へすでに返却されていることになり、紛失されたのはそれよりも後のことだということになる。しかしガリマール版のテキストにある疑問点はまだ解決されていない。私は思いきってセレレット=ピエトリ教授にテキストに誤りがあるように思われることを指摘してみた。そんなことは信じられない、具体的に手紙を書いてくれ、というので、5月7日にパリの郵便局から以下に指摘するような問題点を挙げた手紙を郵送した。これに対して教授は7月6日づけの手紙で解答を寄せてくださった。内容を簡単に要約すれば、出版事情のためヴァリエントを完全に網羅した校訂版を作ることは無理なので、ガリマール版は基本的にアカデミー本に忠実なエディションとし、ヴァリエントも選択せざるえなかったこと、また1970年代に『注意についての論文』を筆写したときの事情や今回のエディションを作るさいにオリジナルを参照できなかったことなどが述べられており、私が指摘したヴァリエントの位置の問題については多忙から調べる時間がないとのことであった。

いずれにせよ、ガリマール版の『注意についての論文』には実際にいくつかの問題点があり、またそもそもオリジナルが直接参照されていない以上、テキストの信頼性に問題があることをここで確認しておきたい。以下、今までのべたことも含めて簡単にまとめつつ、問題点を整理しておこう。

まず『注意についての論文』のテキストとして参照しうるものには次の3つのものがある。

- A: アカデミー本。Prix Saintour のために Académie des Sciences morales et politiques に提出されたもの。ただし、Archives de l'Académie des sciences morales et politiques に保存されているはずのオリジナル（番号202番）は現在のところ行方不明。
- G: ガリマール版。*Mémoire sur l'attention*, in *Cahiers 1894-1914*, tome VI, éd. Nicole Celeyrette-Pietri, 1997, pp. 223-241. 基本的に A に依拠。BNF の第5段階にはない

序文をもつ。*A*と*BNF*の第5段階との間のヴァリエントをいくつか挙げている。

BNF: 国立図書館本。 *Mémoire sur l'attention*, 226 ff., manuscrits conservés à la Bibliothèque nationale de France, n. a. fr. 19021. *A*の直前の段階である第5段階を含む (ff. 92-134)。

問題点としては次のものが挙げられる。

1) *G*が依拠しているとする*A*は現在のところ行方不明であり、アカデミーのアルシーヴにおもむいても参照することはできない。昨年(1997年)出版された*G*は、実はセレレット教授が博士論文執筆中の1970年代にとったノートをもとにしている。従って、*G*はいわばコピーのコピーである。当時細心の注意をはらって筆写したものであっても、30年近くたってしまえば校訂上は別の文書として扱うべきであり、またそれに依拠してエディションを出すのなら、そのことを注で断るべきである。

2) ヴァリエントの選択基準の曖昧さ。*A*と*BNF*とには、細かいものもいれると170前後のヴァリエントがあるが(数え方にもよるが数は多い)、*G*では20個ほどしか挙げられておらず、その選択基準も明らかではない。

3) *G*には脱落ではないかと思われる箇所がある。次の部分では*BNF*と比べて単語が2つ少なくなっており、そのために文法的に理解困難になっている。もちろんオリジナルが参照できない以上、本当にヴァリエントである可能性も十分考えられる。ただその場合でもこれは重要なヴァリエントであり指摘されるべきものだと思うのだが、校異には挙げられていない。このような場合にとりわけ2)のヴァリエントの選択基準の曖昧さがいっそう問題になる(以下問題箇所に下線を付す)。

<i>G</i>	La douleur, la surprise, les troubles comme les songes (ou simplement l'observation froide de la conscience) montrent que la multitude des perceptions possibles au prix de la rareté, de la spécialité et de la brièveté des moments capables d'une connaissance organisée. (p. 235)
----------	---

<i>BNF</i>	La douleur et les troubles, comme les songes, (ou simplement l'observation froide de la conscience) montrent que la multitude des perceptions possibles <u>est immense</u> au prix de la rareté de la particularité et de la brièveté des moments capables d'une connaissance organisée. (f°108)
------------	--

4) 次の箇所も同様。*G*はたしかに理解可能だが、二つの文を等位接続詞なしで並列し前文に理由の意味をもたせるのはちょっと奇妙な印象を受ける。*BNF*のほうは自然である。これも本当にヴァリエントであるならば指摘されるべきものであろう。

G Ainsi, ni l'expérience immédiate, ni le sens commun, ni son mode d'expression ne nous donnent ni l'attitude, ni les instruments que nous désirons « *que je désire* » la psychologie n'est-elle possible que comme le recueil factice de recherches empiriques? (p. 238)

BNF Ainsi, ni l'expérience directe, ni le sens commun ni son mode d'expression ne nous donnent les instruments ni l'attitude que nous désirons — que je désire, — pour tendre, sinon pour résoudre, les problèmes de la psychologie. Peut[-]être la psychologie n'est possible que comme le recueil factice de recherches empiriques? (f°115)

5) *G* ではヴァリアントの位置が間違っ指示されている箇所がある。p. 230 のヴァリアント B (« plus clairement fatals ») は « ... toujours plus *petits* » と結びつけられているが、実際はもう少し前の次の箇所と関係づけなければならない。

G je leur trouve ou je leur prête des mouvements qui me paraissent plus certains, plus universels [...] (p. 230)

BNF je leur trouve ou je leur prête des mouvements qui me paraissent plus clairement fatals, plus universels [...] (f°97)

6) p. 234 のヴァリアント A についても同様にヴァリアントの位置が間違っ指摘されている。

G Sa fragilité paraît sans être cherchée; elle nous émerveille à chaque instant. La clarté et l'enchaînement des connaissances sont d'une délicatesse extrême^A; la simplicité est forcée. L'inanité du rêve jette un doute sur la validité de la veille.
A. *Ajout* : Ce n'est pas une supposition théorique qu'il se dérange à chaque instant! (p. 234)

BNF Sa fragilité paraît sans être cherchée : ce n'est pas une supposition théorique qu'il se dérange à chaque instant! — La clarté et l'enchaînement des connaissances sont d'une délicatesse extrême — L'inanité du rêve jette un doute sur la validité de la veille. (f°107)

7) p. 236 のヴァリエント B についても同様。

G Nous nous scandalisons de former des jugements dans lesquels^B le sujet est étranger à l'attribut. Cette réalité que nous frappons du pied et dans la masse de laquelle nous faisons votre volonté, échappe incessamment de toute définition.

B. *Variante* : est taillée mais vibre notre langue obéissante (p. 236)

BNF Nous nous scandalisons de former des jugements dans lesquels le sujet est étranger à l'attribut. Cette réalité que nous frappons du pied, et dans la masse de laquelle est taillée, mais vibre notre langue obéissante, échappe incessamment de toute définition. (f°111)